様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

2009 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C） 一般
研究期間：2006～2008
課題番号： 18510238
研究課題名（和文）中華人民共和国における生殖コントロールの進展と女性たちの対応

研究課題名（英文）The development of birth-control and the response of women in the People’s Republic of China

研究代表者
小浜 正子（KOHAMA MASAKO）
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：10304560

研究成果の概要：本研究は、上からの生殖コントロールの推進に対する中国の農村女性の対応を明らかにしようとしたものである。研究の結果、調査地の農村では、「一人っ子政策」開始以前の 1970 年代に生殖コントロールが急速に普及したが、これには出産・養育の負担にあえぐ女性たちが政府のキャンペーンに後押しされて、多子を望む家族を説得していった側面があることがわかった。政策は、リプロダクティブ・ライツの実現に対して、両義性を持っていたと言える。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
２００６年度	1,300,000	0	1,300,000
２００７年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総 計	3,500,000	660,000	4,160,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー
キーワード：リプロダクション、中国、人口政策、生殖コントロール、母子保健、ジェンダー、医療・福祉、国際研究者交流

１．研究開始当初の背景

（１）現在も中国の基本国策として堅持・推進されている計画生育政策（いわゆる「一人っ子政策」）については、人口問題からみたその必要性を主張する中国政府などの立場や、人工妊娠中絶を容認できないとする宗教勢力からの反対、また個人や家族の生殖に対する決定権を認めないことに対する批判など、賛否の両論が喧しいが、当の中国女性自身の立場からの意見はあまり聞こえてこない。本研究は、中国の女性にとっての計画生育政策を含む生殖コントロールの意味を解明するために、人民共和国下での母子衛生政策および国家による生殖コントロールの進展過程を歴史的に跡づけ、同時にそれに対して生殖の主体である女性たちがどのように対応し

ていたかを明らかにしようとした。

（２）研究代表者はすでに、2003～2005 年度科研基盤Ｃ「中国近現代における母子衛生政策の研究」において、上海の都市部の、出産の条件が急激に変化しまた生殖コントロールの政策的普及が始まった時期である 1950 年代の母子保健と生殖コントロールをめぐる状況を、文献資料および口述調査によって明らかにしている。本研究は、この成果を踏まえ、都市部とは異なった条件のもとにあった農村部の状況を明らかにし、都市部との比較のもとに、現代中国における生殖コントロールの進展の状況とそれが女性たちにとってどのような意味を持つものであったかを立体的に解明しようとした。

２．研究の目的

（１）この研究は、現代中国の女性にとって計画生育政策（いわゆる「一人っ子政策」）がどのような意味をもっているかを、特に農村部に焦点を当て、女性達の主体的な対応に注目しながら、リプロダクティブ・ヘルス／ライツの視点から歴史的に明らかにしようとするものである。

（２）中国では、現在、都市ではほぼ「一組の夫婦に子供一人」が実現しているのに対して、農村では実質的に子供二人が標準ともいわれるように、都市部と農村部とでリプロダクションの状況に大きな違いがある。これには、計画生育政策の規定が都市と農村で異なっている以外に、農業の戸別請負制度や社会保障の不備の下で多子願望・男児選好が強いと言われること、母子保健を含む医療条件の格差、生殖コントロールの普及のタイムラグなど、リプロダクションをめぐる条件が都市とは異なっているという歴史的経緯にも注意する必要がある。したがって本研究では、強制力を持つ基本国策としての計画生育政策（いわゆる「一人っ子政策」）が開始される 1979 年以前も視野に入れて、農村女性の出産をめぐる条件と、その中で女性たちがどのように産むこと／産まないことを選択していったのかを、文献調査を踏まえつつ農村部での聞き取り調査によって明らかにしようとした。

そしてそれを上海の事例と比較し、また時期的な変化に注目して分析することにより、中華人民共和国における生殖コントロールの政策的な推進と、そこでの女性たちの産む／産まない主体としてのあり方との関係を、それを取り巻く諸条件―母子保健の状況や家族関係を含めた－との関連を踏まえて明らかにしようとした。

３．研究の方法

（１）本研究は、母子保健や計画生育に関する文献資料およびこれまでの研究や上海での調査の結果を踏まえつつ、農村部での聞き取り調査を中心的な方法として行った。この調査は、大連大学との共同研究として、主として 2007 年から 2008 年にかけて、中国東北地方のある村で行った。村の女性たちにインタビューを行うとともに、また何回かの補充調査で現地での参与観察や補充の聞き取りをして、それらを整理・分析とした。

（２）インタビューの方法と内容の概略は、以下のようなものである。

村の出産経験のある女性に、個別にインタビューしてそれぞれの出産と生殖コントロールの経験について語って頂いた。聞き取りの内容は、大きく分けると、１．女性の個人状況、２．出産の様子、３．出産に関する習慣について、４．バース・コントロールについて、である。今回の研究では、人民共和国建国以来半世紀にわたる村の出産と生殖コントロールの状況の変化を、その要因とともに明らかにすることに重点を置いた。そのため、

1920 年代生まれから 1980 年代生まれの女性まで、おおむね各年代ごとに 5 人程度、合計 36 人の女性にインタビューして、1940 年代から最近の 2000 年代までの状況を明らかにすることが出来た。インタビューに際しては、対象者にインタビューの目的や、データの利用の際にプライバシーの保護に留意することなどを説明し、同意を得た。インタビュー対象者は、個人的なつてをたどり、知り合いを紹介してもらう形で探したが、村人との良好な関係を作ることによって、村のさまざまな年齢・階層の女性から話を聞くことが出来た。

（３）これと前後して、村の行政関係者や衛生工作の関係者および経験者にも聞き取りを行った。さらに、この村や鎮の関連施設の見学や、図書館などでの地方文献資料の収集も併せて行った。

（４）以上のようにして収集した口述資料および文献資料を整理し、計画生育および母子保健に関する文献や先行研究を参照して、歴史的変化と地域間の比較に留意しつつ、共同研究者間の議論を重ねて分析を深めた。

（５）本研究は、研究代表者小浜正子と海外共同研究者何燕侠および研究協力者姚毅による共同研究として行った。

４．研究成果

（１）調査地における出産の近代化・医療化の情況は以下のようなものである。

①調査地では、1950 年代まで「老牛婆」とか「接生婆」とか呼ばれる旧式産婆が自宅での出産の介助に当たっていたが、1960 年代に、地元の女性が数ヶ月間の訓練を経て農村助産員となり、村で助産を行うようになった。彼女は産婦の自宅に赴いて、消毒済みの鋏で臍帯を切るなどの方法での助産を行い、当該調査地での出産の近代化はここから始まったといえる。彼女はその後 20 年余にわたって、この村の出産をほぼ一手に引き受け、また、人民公社時代の「はだしの医者」として、農村の医療システムの基層で活躍していた。以前は多かった破傷風による嬰児の死亡は、農村助産員の登場後はほぼなくなったと村人は考えており、社会主義時代の中国農村の公衆衛生・母子保健は、この村では相当に成功していたといえる。

②1980 年代以降、人民公社が解体して農村の医療システムも変容し、農村助産員は個人営業せざるを得なくなった。この村では 1990 年代の出産には、いろいろな形態が混在していて混乱が見える。また、正常産の場合でも病院出産を選択する人が見えるようになる。

③21 世紀に入って、この村ではほとんどの女性が近くの町またはやや遠い市の病院での出産を選択するようになった。これには、出生証明書を医療機関しか発行できなくなったことが影響しており、行政による強力な施設分娩推進の結果だといえる。また、同時に帝王切開が増加し、病院出産の普及は即ち帝王切開の増加である、といった情況が出現した。調査地では、21 世紀に入って、出産の施設化・医療化が急速に進展したのである。

（２）調査地における出産に関する習慣などについてみると、以前は出産の場に立ち会うのはほとんど女性のみであったが、自宅出産での夫の立ち会いが見られるようになるなど、過去半世紀の間にジェンダー構造に変化が見える。また、家庭内では産婦の親世代の意見に従っていたのが、若夫婦の意見が尊重されるようになるなどの変化も見えた。誕生祝いやタブーなどの慣習には、廃れたものも保持されているものもある。

（３）調査地における生殖コントロールの普及とそれに対する女性達の対応については、以下のようなことがわかった。

①調査地で生殖コントロールがはじめて試みられるのは、1960 年代からである。都市では

50年代から労働者層にも普及し始めている生殖コントロールは、農村ではかなり遅れて始まっている。

②この村では、1970年代に本格的に避妊が広まり、60年代以前は子供の数は４、５人以上が多かったのが、おおむね２人となった。政府の計画生育キャンペーンは、人民公社の生産大隊の婦女主任を責任者としてこの地域でもさかんに展開された。出生率は目に見えて下がり、生殖コントロールはこの時期に基本的に普及したと言える。その基盤には、「はだしの医者」などを活用する農村医療システムによって、プライマリ・ヘルスケアが高い成果を上げており、産まれた子供は健康に育つことがほぼ期待できるようになっていたことがある。当初の計画生育キャンペーンは、強制力を持つものではなく、宣伝と説得で生殖コントロールを普及させるものであった。農村の医療システムのネットワークが、村々でその手段を無料で提供した。それは、農業労働に加えて出産・育児の負担にあえぐ女性達に、かなり積極的に受け容れられた。多子・男児願望が強いといわれる中国農村で生殖コントロールが普及したのには、政策による上からの宣伝・動員の力が大きい。農村の女性達は、むしろ政策と同盟して多くの子を産み育てよという家父長制の圧力に抗していった側面があった。

③「一人っ子政策」(ただしこの村では、第一子が女児の場合は第二子の出産が認められている)開始後の1980年代には、計画生育は強制力を持った政策となり、もっと多くの子供を望む村人との矛盾や摩擦が大きくなった。当時の婦女主任は、このような矛盾の最前線に立っており、しばしば村人達から罵られた。ただし、政策で強制されなくても、多くの子供を望まない女性も少なくなかった。

③90年代以降になると、この村では多くの村人はたくさんの子供を産みたがらなくなり、計画生育工作には大きな矛盾はなくなった。現在、村の女性たちは、むしろ自身と子供の健康のために上から組織される健診や避妊に積極的に応じている。計画生育政策は、この村では基本的に定着しているように見える。

④中国農村に根強いといわれている多子願望・男児願望について。この村でも、1960～70年代までは「男の子を産むまでは家族に生殖コントロールをさせてもらえなかった」という人が複数みえ、男児願望は確かに存在した。同時に、男女両方の子供がほしい、という願望も強い。多子願望については、むしろ貧しさのため、「あまり多くの子供がいると大変」として積極的に計画生育キャンペーンに応じた女性も多かった。ただし、家族はもっと多くの子供を望むケースも見え、男児願望の場合とともに、家庭内での矛盾が存在する場合もあることがわかった。多子・男児願望は、必ずしも女性の願望ではなく、家父長制とリプロダクションの当事者である女性との間には、矛盾が存在する場合が少なくない。

近年は、政策で規制されなくても子供が多いと負担なので、１人または２人で充分、という人が多く、都市の情況と大きな違いは感じられない。また、二人目の出産が可能でも女の子ひとりでよい、とする人も見える。

この村は東北地方の中心都市からあまり遠くなく、全国的な水準からみると、現在、貧しい方ではない村で、ここでの情況をどこまで一般化できるかは今後検討する必要がある。だが、この村の調査結果から見る限り、中国農村の多子願望・男子願望には、近年大きな変化が起こっていると言える。

⑤以上より、中国の計画生育政策は、リプロダクティブ・ヘルスに対してはおおむね積極的な、リプロダクティブ・ライツに対しては両義的な意味を持ったといえる。

⑥このような農村女性自身の経験から中国の計画生育政策の意義を考察した研究は、国内外に類似のものがなく、本研究は、国家とリプロダクションの関係を考察する上で、独自の意義をもつものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

①小浜正子「変わるアジアの妊娠・出産５　産後の養生」『ペリネイタルケア』第 28 巻第 5 号、2009 年、62～65 頁、査読無。

②小浜正子・松岡悦子「（総論）変わるアジアの出産－共通性と多様性」『アジア遊学』第 119 号、2009 年 2 月、4～7 頁、査読無。

③何　燕侠・譚娟「『一人っ子政策』下の農村－中国」『アジア遊学』第 119 号、2009 年、20～26 頁、査読無。

④姚　毅「産後の養生『坐月子』－中国」『アジア遊学』第 119 号、2009 年、90～95 頁、査読無。

⑤小浜正子「上海女性は帝王切開がお好き?」『アジア遊学』第 119 号、2009 年、 138～147 頁、査読無。

〔学会発表〕（計４件）

①嶋澤恭子・松岡悦子・幅崎麻紀子・小浜正子・何燕侠「アジアのリプロダクション－出産現場から見る現状と変化」、日本助産学会、東京、2009 年 3 月 21 日。

②小浜正子「計画生育的開端－1950-60 年代的上海」近代華人社会公衛史討論会、中央研究院歴史語言研究所、台北、2008 年 12 月 27 日。

③小浜正子「中華人民共和国成立後の言説空間の変容―新聞紙上の生育問題関連言説から」、“中華人民共和国成立前後における都市社会･文化の変容―空間と生活の再編”国際シンポジウム、日本大学文理学部、東京、2007 年 9 月 23 日。

④小浜正子「従“非法堕胎”到“計画生育”－従建国前後性与生殖言論的変遷看公私界銭的重構」、第二届中国城市社会与大衆文化討論会、成都、2007 年 7 月 14 日。

〔図書〕（計５件）

①小浜正子『中華人民共和国における生殖コントロールの進展と女性たちの対応』2006～2008 年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書、2009 年。

②日本上海史研究会編『建国前後の上海』研文出版、2009 年（小浜正子「非合法堕胎から計画生育へ－建国前後の性と生殖をめぐる言説空間の変容」143～172 頁)。

③久保亨編『シリーズ 20 世紀中国史　第三巻グローバル化と中国』東京大学出版会、近刊（小浜正子「生殖コントロールとジェンダー」185～203 頁）。

④服藤早苗・三成美保編『権力とセクシュアリティ』（ジェンダー史叢書１）明石書店、近刊予定（小浜正子「中国における計画生育のはじまり－1950～60 年代の上海を中心に」所収)。

⑤富田武・李静和編『家族の変容とジェンダー－少子高齢化とグローバル化の中で』日本評論社、2006 年 12 月（小浜正子「中華人民共和国初期の上海における人口政策と生殖コントロールの普及」219～237 頁）。

６．研究組織

（１）研究代表者

小浜　正子（KOHAMA MASAKO）
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：10304560

（２）研究分担者：なし

（３）連携研究者：なし

（４）研究協力者

姚　毅（YAO YI）
玉川学園大学非常勤講師

（５）海外共同研究者

何　燕侠（HE YANXIA）
大連大学・法学院・教授